

衣服と環境温度にかかわる快適性(第9報) 英国人事務職員の着衣量を
支配する個人要因プロフィール —日本人事務職員との比較—
大阪教育大 ○奥窪 朝子 山口大医・公衛 酒井 恒美

目的 前報¹⁾において、英国人事務職員(EW)の温熱的に快適であるための冬期における着衣量(SCV)は、日本人事務職員(JW)のそれに比べて低いことを明らかにした。本報では、着衣量を支配する個人要因プロフィールに視点をおき、両者間にみられる着衣量の差とそれとのかかわりを検討した。

方法 Guildford市および大阪府の冬期におけるフィールド調査によって得たEW: 207名¹⁾およびJW: 840名²⁾のデータを解析に供した。調査項目および調査方法は、既報^{1, 2)}におけると同様である。着衣量を支配する個人要因の解析は、数量化理論第I類によった。着衣量は、標準化着衣量(SCV)³⁾を適用した。

結果 1)EWの着衣量に寄与する個人要因として、快適な着衣の条件に関する3因子の重視度およびスポーツ・運動の習慣などがあげられ、その影響のしかたはJWにおける所見²⁾と一致した。すなわち、それらの要因はEWとJWに共通な着衣量を支配する個人要因であることが明らかにされた。2)EWはJWより、快適な着衣の条件として季節へのふさわしさ因子を重視する度合が有意に低く、運動機能性因子を重視する度合は逆に高かった。スポーツ・運動を行う者の率もまた、EWにおいて有意に高かった。

以上の成績から、EWとJWの着衣量の差には着衣量を支配する上記の個人要因プロフィールの違いが深くかかわっていると考えられる。

文献 1)本学会第38回年次大会研究発表要旨集, p. 135(1986). 2)奥窪, 酒井: 織消誌, 27: 539(1986). 3)奥窪, 酒井, Irving: 織消誌, 27: 532(1986).